令和４年３月５日

令和３年度長野県蘇南高等学校・卒業式式辞

もっと遠くへ！

◇はじめに

本日、ここに令和３年度長野県蘇南高等学校の卒業式を、向井南木曽町長様、伊藤南木曽町教育長様のご臨席をたまわり、そして保護者の皆様のご出席をいただき、挙行できることになりましたことを、まずもって御礼申し上げます。

そして１・２年生の皆さん、３年目に入ったコロナ感染症の流行のため、全校がそろって卒業式を行える高校は、長野県内でもほんのわずかです。今日は一緒に心を込めて、卒業生をお祝いしましょう。

◇何とか前へ！

卒業生の皆さん、心からおめでとう！

今日は、南アフリカ共和国に生まれた、ひとりの女の子の話をします。

白人が黒人に対してすさまじい人種差別を行っていたこの国で、その女の子は白人の家庭に生まれました。彼女の父親は深刻なアルコール依存症で、ひどい家庭内暴力をふるっていました。彼女が 15 歳のとき、アルコールで錯乱状態になった父親は、いつものように彼女を暴行し、逃げる彼女を追いかけ、銃撃しました。ついにわが子を守るために母親が父親を射殺します。母親は正当防衛が認められ、罪には問われませんでした。

彼女にはどうしてもバレエ・ダンサーになりたいという夢がありました。17 歳の時に彼女と母親はアメリカのニューヨークに渡ります。でも母親はすぐにわずかのお金を残してイタリアに旅立ってしまいました。女の子は懸命にバレエを学び、挑戦を続けましたが、膝に怪我をして踊れなくなります。彼女は母親に頼み込んで片道の交通費をもらってロサンゼルスに行き、女優の道を目指して仕事をさがしますが、アフリカ生まれの訛りのある彼女にチャンスはありませんでした。

お金がなくなり、もうこれ以上は生きていけないという限界に追いつめられたとき、彼女の手元に残った唯一のものは南アフリカの小切手でした。彼女は銀行に行って、現金に交換してほしいと窓口で頼みます。しかし銀行員に、こんなアフリカの紙切れがアメリカで現金になるわけがないと蔑んだように断られました。彼女は必死に頼み続けます。これが現金に変わらなければ自分は生きていけないと、ほとんど金切り声で叫びながら、要求し続けたのです。銀行の窓口にはやがて長い列ができ、彼女は迷惑者でした。それでも彼女は引き下がらなかった。

そのとき列の後ろの方から一人の男性が現れて、銀行員に、自分はこの小切手は現金化できるルールになっていることを知っており、あなたが知らないだけだと説明してくれました。そしてその男性は、困ったことがあればここに連絡をくれれば仕事を紹介してあげるよと、名刺を渡してくれたのでした。のちに彼女は、その男性がアメリカの映画界の有名なマネージャーなのだということを知ります。映画に傍役として出演するようになった彼女の名は、シャーリーズ・セロン。やがて 28 歳の時にアカデミー主演女優賞を受賞し、現在は世界を代表する女優として大活躍しています。

彼女が絶望から這い上がって夢をつかんのだのは、たまたま銀行で有名なマネージャーと出会ったという幸運によるものなのだと思われがちですが、私は違うと思います。

彼女が夢をつかんだのは、あきらめずに行動し続けたからです。不幸な生い立ちであっても自分の夢を追い求め、怪我で挫折しても別の夢に方向転換し、それすら絶望的になっても銀行で引き下

がらずに現金を要求し続けた、そのあきらめない彼女の生き方こそが、彼女を支える人々を引き寄せたのだと思うのです。

蘇南高校の目標は「開拓者精神」です。それは未来の世界の幸せを予想して、今の自分が努力することだと、私は折にふれて語ってきました。コロナ感染症の流行が続いていて、新しい進路に踏み出す皆さんの未来には、思わぬ壁が現れるはずです。でも蘇南高校の日々で私たちが重ねてきたのは、コロナがあるからといってあきらめず、未来を想像し続ける生き方でした。

だから皆さんはきっとシャーリーズ・セロンのように、行動を続けて、何とか前に進もうとしてくれるでしょう。そう私は確信しています。それでも困り果てて誰かを頼りたくなることもあるかもしれない。そのときは、これからも私や先生たちを頼ってください。私たちは皆さんにとってのマネージャーのような存在でありたいと願っています。

そして私たちが卒業式をしているまさにこのときに、ウクライナの人々が、隣の大国ロシアに理不尽にも一方的に侵略され、大勢の無辜の市民・子どもたちが殺されています。ウクライナの人々は、あきらめずに懸命に闘っています。皆さんの高校の卒業式は、戦争のただなかに行われたのだということを心に刻んでほしいと思います。私は大学３年のときにウクライナに旅をしました。思い出の街が爆破されていくさまをニュースで見て、胸がはりさける思いです。侵略に抵抗するためのあきらめない方法とは何でしょうか。今、世界の人々はウクライナに資金や武器を送るとともに、ロシアを経済的に孤立させて苦しめることを進めています。なるべく戦争を拡大しない方法です。一方で、いざというときに備えて日本の非核三原則を見直すべきだという意見もあります。平和を守るとは、どういう道をとるべきなのか、是非、これからの人生の中で考えてほしい。このことも皆さんに呼びかけます。

◇保護者の皆様へのお祝い

さて、お子様の高校卒業という大きな節目を迎えた保護者の皆様にも、心からのお祝いを申し上げます。

皆様自身も今までの人生の中で様々な壁を乗り越え、今日、ここで、お子さんの新しい旅立ちの瞬間に立ち会っているのだと拝察します。本当におめでとうございます。

今日は、保護者の皆様にとっても新しい人生への再出発の瞬間です。卒業生に向けた私の言葉は、同時に保護者の皆様へのメッセージでもあると受け取っていただければ幸いです。

◇もっと遠くへ！

卒業生の皆さんに、もう一人、世界を旅した人物のことを紹介します。

今から 54 年前の 1968 年６月、イギリスのサンデー・タイムズという新聞が、一人でヨットに乗って、どこの港にも立ち寄らずに世界一周をするレース「ゴールデン・グローブ・チャレンジ」を開催しました。今ならば２カ月で世界一周ができますが、衛星電話も GPS もない 54 年前は、１年がかりの命がけのレースでした。

９人の冒険家がイギリスのプリマス港を出発して、アフリカの喜望峰をまわりインド洋に出ていきました。その９人のうち６名が死亡または脱落します。最も先頭を走っていたかに見えたイギリス人のクローハーストは、翌 1969 年１月以降、無線が通じない状態が多くなります。その後、無人となったクローハーストのヨットが発見され、残された航海日誌から、彼がブラジル沖で時間をつぶして偽装工作をしていたことが明らかになります。彼は、今も見つかっていません。

レースは、フランス人のベルナール・モワテシエが先頭を走り、それをイギリス人のジョンストンが追いかけていました。フランスではモワテシエが国民的英雄としてたたえられ、彼がプリマス

にゴールするところを大勢の国民によって出迎える準備が進められていきました。
モワテシエという人は、フランスの植民地であったベトナムで生まれています。第二次世界大戦のとき、ベトナムは日本に占領され、モワテシエの父親は日本軍の捕虜になりました。モワテシエは自宅にフランスの国旗をかかげて抵抗し、日本軍に連行されました。信念の人でした。
1969 年２月、モワテシエは、南アメリカの先端部ホーン岬をまわりました。ここからは大西洋を一気に北上してプリマスを目指すのみです。陸上競技で言うと、最後のコーナーをまわって直線コースに入ったようなものです。
ところが、このときにモワテシエがとった行動に、世界中の人々が驚きます。
彼はヨットの方向を変えて、なんと２巡目の世界一周に乗り出してしまったのです。結果として２番手であったイギリスのジョンストンが栄冠をつかみ、賞金 5000 ポンド（約 3000 万円に相当）を獲得したのでした。フランス国民は激怒します。モワテシエの子どもは、「明日からどうやって生きて行けばいいの」と嘆いたと言います。これに対して愛する夫のことを理解していた妻は、娘に、「あれがお父さんなんだから、このまま生きていくしかないじゃないの」と答えたのでした。
モワテシエは、ヨットの近くを通ったタンカーに、丸めた手紙をパチンコで投げつけて、メッセージを世界に伝えました。そこにはこう書いてありました。

――（勝つという）記録に意味はない。海にこそ私の幸せがあり、心が救われる。だから私は航海を続ける。

結局、モワテシエは、なお半年、世界二周目の航海を続けました。そしてイギリスではなく、南太平洋のタヒチを最終到達地点にしたのでした。
皆さんにとって、高校時代のゴール・目標とは、何だったでしょうか。単位をちゃんともらうこと、テストで 80 点をとること、恋人ができること、インターハイに出場すること、希望する会社に入ること、大学に合格すること…。保護者の皆さんならば、子どもが無事に高校を卒業すること…。
でも皆さんはわかっています。そこは最終的なゴールではない。
ゴールが目の前に見えてきた瞬間に悟るのです。自分には、もっと先に別のゴールがあるのだと。さらに言えば、ゴール・目標は達成できたかどうかではなくて、チャレンジをしている自分自身に一番の意味があるのだと、わかってくるのです。
勝つかどうかに意味はない。人生という海を旅するということ、そこに幸せがある。だから挑戦を続ける。
そのとき、海は、みなさんの「ふるさと」になる。

では皆さん、私は皆さんと出会えて本当に幸せでした。皆さんは、私の大切な教え子です。誇らしい教え子です。
長野県蘇南高等学校から 2022 年の世界へ、心からの拍手とともに、皆さんを送り出します。
もっと遠くへ！
どうか、人生の遠洋航海を楽しんでください！

令和４年（2022 年）３月５日

長野県蘇南高等学校長　　　小川幸司